

富士山

- その心象風景と古地図に見る表現 -

長岡正利¹⁾

1. はじめに

地質標本館の特別展「富士山-過去・現在・未来」会場で、「富士見十三州輿地全図」(口絵2頁と第8図)が正面入り口奥の床面に展示されました。地図には、江戸時代後期の村々の名称や街道筋が克明に描かれており、会期の前半が夏休みだったこともあって、子供連れなどで、150年ほど前の近郊の状況を想像しつつ見入っておられる訪問者も多く見受けられました(第1図)。

ここでは、この展示を契機に、江戸時代後期を中心として、富士山についての人々の認識と当時の地図表現について紹介します。

2. 富士山への人々の想い

富士山は、数々の文芸作品や絵画に取り上げられてきた。古くは、『万葉集』における「不二の高嶺」や、『常陸国風土記』における筑波山との高さ



第1図 特別展「富士山-過去・現在・未来」会場で「富士見十三州輿地全図」展示風景(写真産総研)。

比べに始まって、古今の名作に登場している。

その火山活動を述べた例としては、古くは、平安時代の「竹取物語」では、帝からの迎えをおして月の都に帰ったかぐや姫を懐かしんで、帝が、天に近いという駿河の国にある山で、姫から贈られた御



第2図 『大日本名所一覽』(喜齋立祥, 慶応元年(1865); 神戸市立博物館所蔵, 部分)。

1) 国土環境(株)(元国土地理院):
〒154-8585 東京都世田谷区駒沢3-15-1

キーワード: 絵図, 古地図, 鳥瞰図, 地図, 富士山, 富士見十三州輿地全図, 伊能図

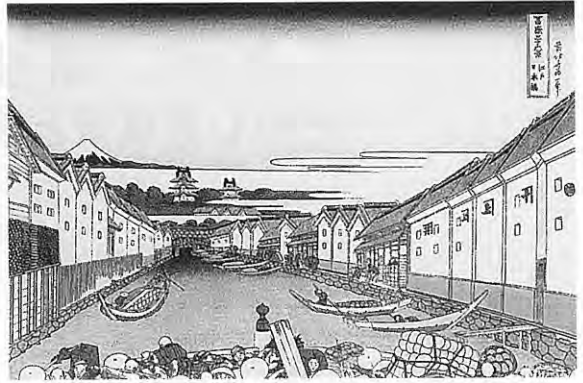


第3図 江戸日本橋駿河町～本両替町の通り、越後屋前から望む富士山(焦点距離75mmカメラでの景観を再現; 東京大学 地域/情報研究室製作)。

ふみ文・不死の薬などを燃したことから、「その山をふしの山とは名づけける。その煙いまだ雲の中へたち昇るとぞいひ伝へたる。」とあり、往時、噴煙が立ち昇っていたさまを伝えている。

富士山は、日本の美意識の中で一種象徴的に扱われた。第2図は、二代目ひろしげと言われた喜齋立祥(「東海道五十三次」の安藤広重の婿養子)の鳥瞰日本図である。いかにも広重を思わせる浮世絵風の美しいものであり、白雪の富士山を中心に日本列島が展開する。近代の地図とは違って伸びやかな表現技法をとっており、その穏やかな色調とあわせてまさに一幅の絵である。この図は、日本地図としての形の正確さよりは、各地の隣接関係が判れば良いとする目的とあわせて、当時の美意識に合致したゆえに人々に好まれ、明治となっても引き続いて版を重ねた。

江戸の街づくりにおいても、富士山の眺望が強く意識されたようである。第3図は、日本橋駿河町の通りの遙か彼方に、富士山が確実に見えたことを実証するコンピュータグラフィックスである。東海道の起点である日本橋を北へ渡った先で左へ折れれば、道を挟んで「越後屋」(現在の三越)や、同じ系列の「三井両替店」(後の三井銀行・財閥)があり、こ



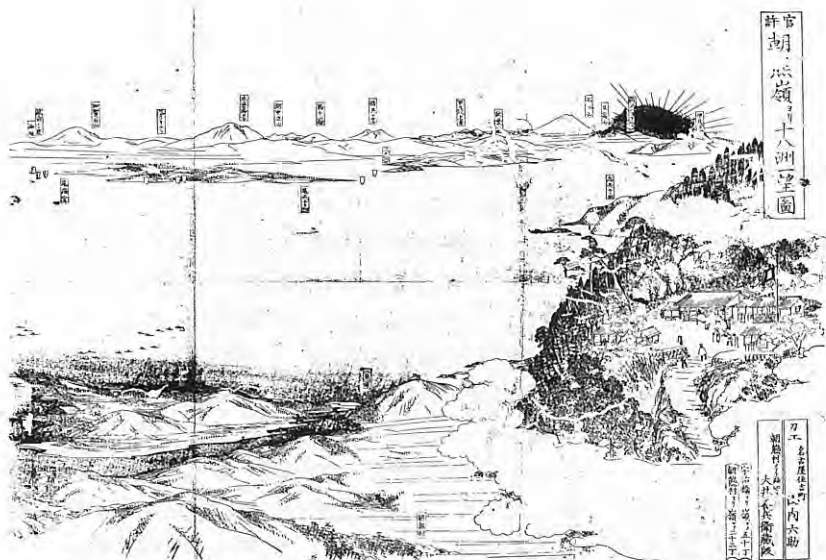
第4図 『富嶽三十六景 江戸日本橋』(葛飾北斎、天保2年(1831)) 橋上から、その雑踏と日本橋川の彼方の千代田城を望む、その左に富士山が覗く。

の辺りは商人の町として栄えた。江戸時代の様式美の極致のような町並み、整然とたなが軒を連ねる彼方に、冬などは連日、朝な夕なに富士山を望むことが出来た。言うまでもないが、これに並行する総ての通りでは、例外なく同じ眺めが展開する。

第4図の「江戸日本橋」では、橋よりも少し高いところに視点をおいて、前図の通りとはやや斜交した日本橋川の先を眺望したものであり、千代田城が正面に見えて、その斜交の故に富士山は左端(本当はもっと左の筈)に覗く。現代の、高速道路に空を塞がれた日本橋界限では想像も出来ないが、おだやかに晴れ上がった元旦の朝などはさぞかし爽やかな眺めであったことであろう。



第5図 『江戸鳥瞰図』(鋤形恵斎、江戸後期; 神戸市立博物館所蔵)。



第6図 『朝熊嶺ヨリ十八州一望図』(江戸後期; 故・師橋辰夫氏所蔵; 部分) 昇る朝日
の左に富士山。ほか、御嶽山、乗鞍岳、加賀白山など。

第5図は、文化文政期(19世紀初頭)の^{くわがたけいさい} 鋤形恵斎(北尾^{まさよし}政美)による鳥瞰図である。人物・風景・草花などの絵にすぐれ、浮世絵師から美作津島藩の御用絵師となった異色の^{みまさか} 経歴で知られるが、北斎の前図にみる西洋風遠近法のように趣向を凝らしたところはなく、自然界を見るがままに、格調高く描いている。紹介の図は、隅田川の東上空に視点を置いて、江戸下町に甍を連ねる町屋と往来の人々を細密に描いたもの。隅田川に架かる橋と行き交う船、緑豊かな御城、遙かに高く富士山と、丹沢から秩父の山並み、長閑に沈み行く夕陽に、作者の典雅な思いが伝わってくる。

3. 富士山の眺望

ところで、富士山を望むことができるのは、口絵と第8図で紹介の地図における13ヶ国のほか、さらに遠くでは、新潟・三重・福島県などがその限界(本号68頁の第3

図参照)として知られている。なかでも最遠の地の一つとして、お伊勢参りの地に近い三重県朝熊ヶ岳が古くから有名であった。第6図は、墨刷り1枚ものである。これは、現地での展望案内のほかに、旅がもっぱら徒歩によった時代には、軽くてかさばらないことから町内や家族への格好の土産物となったものであろう。朝熊ヶ岳は鳥羽市の南東にあり、「十八州一望」とあるように昔から好展望の地として知られていた。図の右から順に、富士山ほか諸山が連なるが、中には疑わしいものも見受けられる。八ヶ岳・立山は、明らかに、南～中央アルプスの諸峰の誤認である。

4. 古地図に描かれた富士山

これまで述べてきたように、日本人の心象風景とも言える富士山であるが、この山を地図表現するについては、特別の対象としての配慮がなされた



第7図 『伊能図中図』に見る富士山(幕府天文方、文政4年(1821); 東京国立博物館所蔵図の(株)武揚堂複製図、部分)。

ようである。冒頭の、富士山を中央に配して鳥瞰風に日本を描いた図もその一つである。

第7図に、江戸時代後期の伊能忠敬による地図を示す。伊能の学問的目的は子午線1度の長さの実測、つまり地球の大きさの把握にあったことから、その測量では、随所での天文観測(天測)によって緯度を確定し、慎重な導線法(方位と距離実測により目標位置を決定)に加えて、遠方の山頂などへの方位角を用いた交会法(2地点以上からの方位角により目標位置を決定)で誤差の消去に努めた。その結果、実測された海岸沿いと街道筋の位置については、現代の地図と比較してもそう見劣りはしない。一方で、測量路線沿い以外については空白であったり、山などは当時の地図表現法に倣ってどれも同じように絵画的に、街道筋や海岸などから見て正立させた山の絵として描かれているに過ぎない。しかし、富士山のように特徴ある山容のものは写実的に描かれた。

前述の方位線には、関東・東海地方からのものが多いが、遠方としては、西方300kmの三重県や、東の千葉県銚子市などがある。毎日のように測量の歩を進めた伊能測量隊ではあるが、遠隔の地からも実によく富士山を見ている。これは、当時の空がよく澄んでいたことの証左でもあろう。

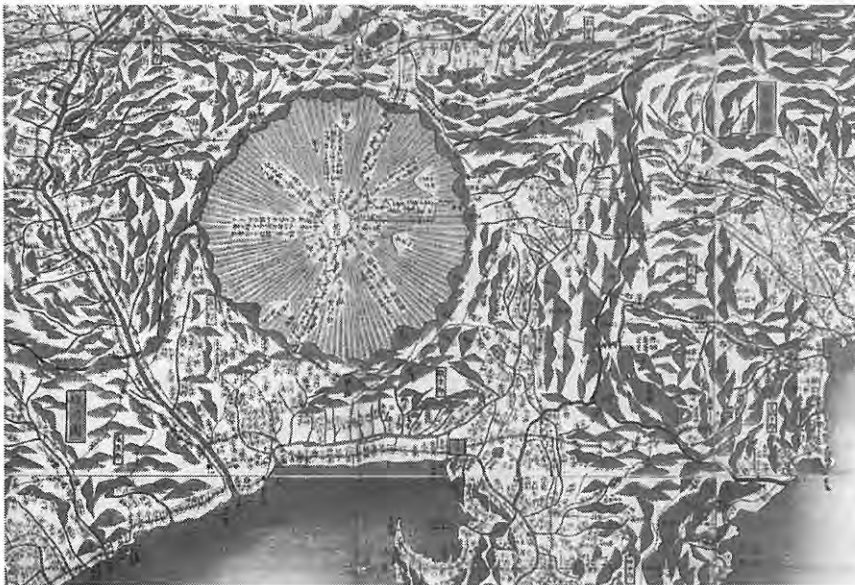
第8図は、「富士見」を冠した雄大かつ彩色美麗な

大絵図の一部である。関八州かんぱっしゅうといわれた、武蔵・相模・下総・上総・安房・常陸・上野・下野の8ヶ国に加えて、富士山を望見することのできる遠江・駿河・伊豆・甲斐・信濃の国を包括したものである。しかし、ここに紹介した地図には、平野部から富士山を見ることが稀な地域も広く含まれており、図名にあるような富士を眺望できる諸国の地図というよりは、江戸を中心とする大経済圏の概況図のように見える。口絵2頁にその全体を示す。地図の作者は、江戸市井の地理学者秋山永年であり、図中には、官撰の諸図(幕府撰国絵図や伊能図など)は秘蔵されていて世に伝えられていないことから、十余年を費やして諸国を巡り寝食を忘れてとりまとめたものとある。純粋に民間による地図作成・出版であり、当時の町人経済の勢いを見るような、力に満ちた地図である。

この地図が作成された天保年間の前半には、天保の飢饉による飢饉や米価狂騰の中で、諸国での一揆打壊しが続いた。その後数年で経済は復興したものの、今度は贅沢が過ぎるとして改革が発せられた。幕府は、勤儉を旨として風俗をただすとともに、諸物価高騰の元凶であるとして株仲間(流通を独占する諸問屋)の解散を命じるなど、物価引下げを意図した。しかし、諸事儉約と風俗統制は、その方法が過激に過ぎるとして世間の反発を招き、これを推進した老中水野忠邦が失脚して改革が終わり

を遂げたのが天保14年。この地図はまさにそのころに出版されたものである。江戸後期には、経済や町人文化の発展とともに、日常生活の場においてもこのような広域を概観できる地図の需要が多くなっていったものであろう。

当時の地図では、伊能図でも同様のように、地図全体では様々な向きの山々が並んでいるにすぎない。ここで、図における一つの主題とも見える富士山について説明する。第3図にCGで例示したように、隔てるものとてもな



第8図 『富士見十三州輿地全図』に見る富士山周辺(天保13年(1842)、秋山永年)。第7図の伊能図とほぼ同じ範囲を示す。全体は、口絵2頁に。



第9図 「大日本富士山絶頂之図」(歌川貞秀, 安政4年(1857); 神奈川県立歴史博物館所蔵)。

い当時の江戸の街では、かなりの場所で秀麗な富士の姿が望みできたはずである。一方では、江戸中期には、災厄を払い豊穰を招くという富士信仰が盛んとなっていて、富士山登拝を目的とする富士講(信徒組織)が各地に組織され、江戸八百八講といわれるほどであった。地図作成に際しても当然それらを無視することはできず、その登拝路を正しく描くことは地図の販売上も重要であったであろうことから、登山路のみならず、山頂のお鉢廻りの一部に2経路あることも正しく描かれている。なお、絵図一般における山の描かれ方は前述のとおりであるが、この富士山の場合は、山体が円錐形であることに加えて、周囲からの登拝路を描く必要上から、結果としては近代の地図表現法にも通じるような、当時としては新機軸であるケバ(葎)表現に近いものとなっている。

この地図は、同種のものがあったこともあったことから大きな反響を呼んだようで、江戸時代においては9種ほどの版が知られており、明治ともなっても出版された。

江戸時代においては、多種多様な地図が作られた。商業活動の活発化とともに、今日で言う住宅地図のような小型の「切絵図」から、江戸全域の地図や諸国の地図、日本図が販売された。それらの価格は不明であるが、墨刷り小型の使い捨て的なものから、この種の地図のような、かなり高価なものがあったことが推定される。これが大商人や両替屋の大広間に広げられて、諸国物産の商いに思いを致す

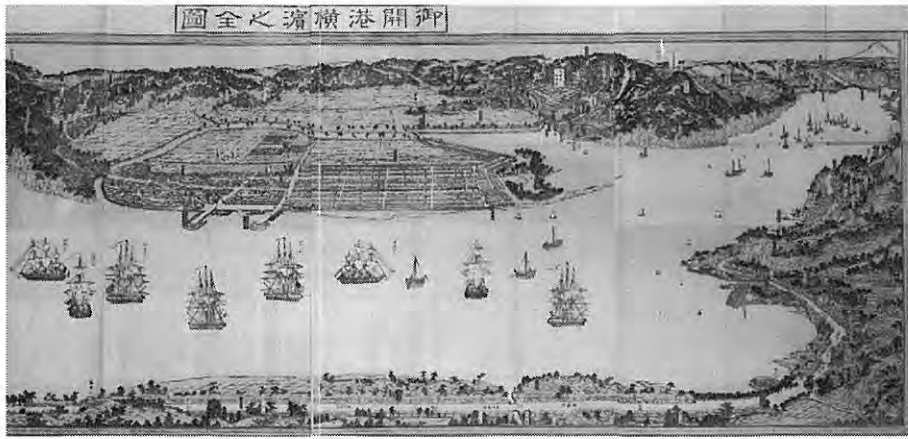
人々の前にあったであろうこと、あるいは、富士山を遙かに望む江戸町内の富士講先達のもとで、人々が富士登拝への道程を想い描きつつ、図上をなぞっていた様などが想像される楽しい地図である。

5. 幕末から明治・大正へ、富士山は依然として

時代は下って、次に、幕末期から明治期を生き延びた浮世絵師、歌川(または五雲亭)貞秀(地図を描いては橋本玉蘭齋)による鳥瞰図を紹介する。彼の絵は、彫師泣かせといわれるほど細密精緻さには定評があり、巧みな誇張と写実的な鳥瞰図法を使いながらも、対象を際立たせている。第9図は、異様な軟体動物の口を思わせるような富士山頂火口の俯瞰図である。よく見ると、お鉢廻りを巡って蟻の行列のような登拝者と、山頂一帯の見どころや石室などを克明に描いている。

貞秀にとっての富士山はなじみの題材であった。第10図は彼の代表作で、安政6年(1859)の開港後の横浜を描いた大絵図であるが、ここでも点景としての富士山を片隅に描いている。図は、視点を横浜対岸の小安村にとって上空からの景観を想像しつつ描いたものであり、その後の横浜の変貌を加筆しつつ何回も版を重ねた。

湾内には、欧米諸国の国旗を描き分けた洋式帆船が異国情緒を見せているとはいえ、後にこの一帯がたどる激変の歴史を予感させるものはない。右奥には、のどかに和船が停泊する内浦と、遙か



第10図 『御開港横浜大絵図 完』(歌川貞秀,万延元年(1860);神戸市立博物館所蔵,部分)手前の東海道の右に神奈川宿,正面新開地の中央は港崎遊郭。

その様式美と時代の静けさ、明治の維新が近づくにつれて世の浮き立つさまが地図にも表れ、大正期には時代の叙情と近代の発展を謳歌するような地図表現、絵のように美しかったであろう古い日本が、次第に現代に近づいて来るさまが手に取るようである。

に望む富士山。前の火口俯瞰図が「動」であるのに対して、この絵図は「静」そのもの。わずか130年余り前の、まさに絵のような世界である。

地図の世界における日本的な美の系譜は、この半世紀後、大正広重を自称した吉田初三郎の鳥瞰図に至って、さらに時代を反映した展開を見せる。叙情あふれる彼の絵は、大正から昭和前半にかけて一世を風靡したが、描かれる風景の中には、ほとんどの場合に、見事に整えられた構図の彼方の

点景としての富士山が見える。第11図では、房総半島の海側上空に視点を置いて、東京中心部を隔てて望む白雪を戴く孤峰富士と、重畳と連なる山々、さらにその背後遙かには九州から大陸の上海までを描いている。まだ見ぬ地への、旅への思いを誘う構図である。

以上、富士山を中心として各種の地図を紹介してきた。

太平の世を謳歌した江戸時代には、

参考文献

平野榮治編(1987):『富士浅間信仰』,雄山閣。
 神奈川県立歴史博物館編(1997):『横浜浮世絵と空とぶ絵師五雲亭貞秀』。
 神戸市立博物館編(1994):『古地図セレクション』。
 長岡正利(1999):『国土地理院所蔵 地図・史料展観』,国土地理院技術資料A・1-No.213。
 山と地図のフォーラム編著・田代博監修(1998):『富士山展望百科』,実業之日本社,286p。
 NAGAOKA Masatoshi(2003): Mt. Fuji-san-on the old maps and its imageries in historical period,

<受付:2003年9月3日>



第11図 『東京大絵図』(吉田初三郎,昭和4年(1929);藤本一美氏所蔵,左半部)。